ゲオルグ・ジンメル「食事の社会学」

訳：石村秀登、石村華代

任意の集団に属するあらゆる個人にもともと等しく備わっている本質的な要素は、たいてい、その個人のもつ最も高尚な衝動や関心ではなく、しばしば最も低次の衝動や関心として現れる。このことは、社会的な存在の宿命ともいえる。

その理由は、有機体の内部で、これらによって最も早く獲得された形式と機能、つまり、原始的で、いまだ洗練されておらず、単に生命にとって欠かせないというだけのものと結びついている様々な形式と機能が、それぞれの個人へと最も確実に受け継がれているということだけではない。それは、誰もが所有するものは、いつも明らかに、最も少ししか所有していない人の所有するものでしかありえないからである。

人類の宿命であるのは、とにかく、より高いものはより低いものへと下降しうるが、より低いものはより高いものへとたやすく同じ様には上昇しえないということであるので、一般的に、誰もが一致するレベルは、最下位にあるもののレベルにきわめて近づくに違いないであろう。より高きもの、精神化されたもの、意義あるもののすべては、選ばれた個人のもとだけではなく、あらゆる個人がそれらの価値を担うところでも発展するのである。それらはなにしろあらゆる個人のもとで、何らかの異なる傾向を示しつつ、共通のものから枝分かれしている。

さて、人間にとって共通のあらゆるもののうちでも最も等しく当てはまるのは、人間が食べたり飲んだりしなければならないということである。そしてまさにこのことは奇妙なことに、最も利己的なものであり、最も絶対的で、最も直接的に個人へと限定されたものである。私が考えることを、私は他の人に知らせることができる。私が見たものを、私は他の人に見せることができる。私が話すことを、数百人の人々が聞くことができる。しかし、個人が食べるものについては、それを、どんな状況であろうと他の人が食べることはできない。

高次の領域においては、ある人が所有するつもりのものを、他の人が無条件に諦めねばならないということは決して起こらない。しかし、このような原始的で生理的なものは、まったく一般的に人間らしさであるのだから、それはまさに共同の諸行為の内容となって、食事という社会学的な形象が生じる。その形象は、食の排他的な利己性に、高次にある精神的な誘因によってはまず得られないような、度重なる集まりや一体感のある慣れ親しみをじかに結びつけるのである。

特に関心を分かち合っているというわけでもない人々でも、食卓を囲めばうまく付き合いうる。このような可能性は、物質的な関心のもつ素朴さと、それゆえの例外のなさに結

びついているわけだが、このような可能性の中に、食事のもつ計り知れない社会的な意義が横たわっているのである。

古代の儀式は、世界規模の宗教とは対照的に、地域に住まう人々による限られた集団に向けて執り行われるのが常であったのだが、それゆえ、供犠の食事でまとまることができた。特に古代のセム人においては、このことは、神の食卓への共同の参入を通して、きょうだい関係を結ぶことを意味していた。

共同での飲食は、それ自体がアラビア人にとってはまさに宿敵をも友に代えるものであり、それはひとを社会へと適応させようとする巨大な力を作動させる。ひとは実際には「同じもの」を食べたり飲んだりしているのでは決してなく、まったく排他的な一人分をそうしており、原始的なイメージを作り出している。このことをそのような力は見ないようにさせているのであり、ひとはこれでもって共同の血と肉を生み出しているのである。

パンをキリストの肉体と同一視するキリスト教の晩餐がはじめて、このような神秘主義を基盤として、食べられたものをも実際に自己へと同一化することを生み出したのであり、それとともに、参加者たちの間でのまったく独自の結びつき方を編み出したのである。というのも、各々が、他の人に拒まれた、全体のうちの断片を摂るのではなく、秘密に満ちた、各人に同様に分け与えられている不可分さのうちにある全体を摂るところでは、それぞれが食べるということの利己的な排他性は、完全に克服されているからである。

共同の食事は、生理的な原始性と避けようのない一般性という出来事を、共同体的な相互作用とそれに伴う超個人的な意義をもつ領域へと高める。まさにそのような理由で、それは過去の多くの時代にきわめて大きな社会的価値を獲得してきた。そのような価値を最もはっきりと示しているのが、会食の禁止である。

このようなわけで、ケンブリッジのギルドでは、11世紀に、ギルドの同志を殺害した者と飲食した者に対して重い刑罰を科すことを定めた。また、1267年のウィーン公会議では、ユダヤ人に反発する傾向がさらに強まる中で、キリスト教徒がユダヤ教徒と会食してはならないという指示が出された。インドでは、より低いカーストに属する人との共同の食事による汚れは、時として致命的な結果を招いた。ヒンドゥー教徒は、禁じられた相手と食卓を囲んでいないことを完全に確認できるよう、しばしば一人で食事をしていた。

中世のあらゆるギルド制度において、共同の飲食は、今日ではもはや決して同じように追体験することができないほど重要で、死活に関わるものだった。不確かで変動の多い中世の生活において、共同の飲食は、いわば目に見える形でのはっきりとしたものであるし、共に所属していることの安心感をたえず新たに志向する一つの象徴でもある。そのように信じられていたのかもしれない。

そして、それとともに開かれるのは、栄養が単なる生理的な外面であるにもかかわらず、それを限りなく高みにある秩序の原則へと移動させる連関である。食事が社会学的な関心事となればなるほど、それは、より様式化され、より美的になり、より超個人的に規制さ

れて形成されるようになる。そこで成立するのが、飲食についてのあらゆる規則である。詳しく言うと、食材としての食事というような、ここでは重要でないことに関してではなく、食事の摂り方に関する規則が成立するのである。

まずここで現れたのが、食事の規則性である。きわめて低位にある種族について知られているのは、彼らが決まった時刻ではなく、無秩序に、それぞれがちょうどお腹がすいたときに食べる、ということである。しかしながら、食事の共同性はただちに時間的な規則性へとつながる。というのも、あらかじめ決まった時刻にのみ、ある集団は集いうるからだ。――このことは、食事の自然主義を克服する第一歩である。

同じ方向にあるのが、食事の序列と呼ばれうるものである。もはや思うがままに無規則に皿へと手を伸ばすのではなく、皿に取るさいにも一定の順序が守られるようになる。現在の労働組合の先駆であるイギリスの同業者クラブでは、順番を守らずに飲むことに対して刑罰が定められていることがあった。

これらのすべてとともに、個人の移ろいやすい欲求に関する形式的な規範が定められたのである。そのような規範は、食事の社会化を、美的な様式化へと高めたのであり、このような様式化は、今やふたたび社会化へとさかのぼって働きかけるのである。というのも、腹を満たすというような目的ではなく、さらに美的な満足をも食事に求めようとするところでは、ある労力が必要だからである。そのような労力を払いうるのは、個人というよりもむしろ多数による共同体であるし、またそれだけでなく、美的な満足は内面的にも、個人よりも共同体の方を正当な担い手としてもつのである。

最後に、食事作法の規制、美的な原則にしたがった規格化が、食事の社会化の成果である。低い身分では、食事の中心に位置するのは本質的に食材に応じた食べ物であって、そこでは食事作法の特徴的な規制は形づくられない。より高い身分では――少なくとも表向きは――「社交界」での頂点に至るまで、場を共有することの魅力が食事のもつ単なる物質性を凌いでおり、ナイフとフォークの使い方から食卓での会話にふさわしいテーマにいたる、食事の際の一定の振る舞いのための規則集が成立しているのである。農家や労働者が集う祭りで食べる人々の姿と比べて、教養ある人々が集う夕食会では、個々人に応じた身振りは完全に図式化されて、超個人的に規制されているように思われる。このような厳格な規格化と同形性には、外部のいかなる目的があるわけでもない。それらがもっぱら意味するのは、食事を社会的な形式へと移行させることによって、物質主義的で個人的な利己心が解消されたり変形されたりすることなのだ。

器具を使った食事にはすでに、美的な様式の基礎がある。手づかみでの食事は、ナイフとフォークを使った食事よりもおよそ明白に個人主義的である。手食は、各々をより直接的に素材と結びつけており、控えめさを欠いた欲望の表明である。

ナイフとフォークという食器がそのような欲望をある程度の距離へと押しやることによって、食事のプロセスに関する、お互いの結びつきを促す共通の形式が設定される。そ

れは、手食では決して成立しないようなものである。ここでは、一般的に規格化された形式が、同時に、より自由な形式として現れることによって、互いに結びつこうとする動機が高まるのである。ナイフとフォークを拳全体で包み込むのは、運動の自由を妨害しているから下品なのである。

無教養な人々の食事作法は堅くてぎこちないが、超個人的に規制されているわけではない。教養ある人々の作法は、しなやかで自由な印象を与えることで、このような規制を備えている。それは、社会的な規格化がその本来の生命を個人の自由において初めて勝ち取るということの象徴のようである。自由とは、このような方法で、自然主義的な個人主義の反対として示されるものなのである。

そしてここでもう一度証明されるのは、以下のような総合である。つまり、原始時代において各人がただそこからつかみ取りしていたような鉢に比べて、皿とは、個人主義的に作られたものである。皿が示しているのは、この食事の分け前はもっぱらこの一人の人のために取り分けられている、ということである。皿の丸い形が際立たせているのは、以下のことである。すなわち、円環線は最も閉鎖的であり、その内容を最も決定的に自らに集中させている、ということである。それに対して、万人用の鉢は、角張っているか楕円形であり、それゆえそれほどまでに閉ざされることはないだろう。皿は、秩序を象徴している。そのような秩序は、個人の欲求に、組織された全体の一部としての個人に認められるべきものを与えるのだが、その代わりにその個人の枠を越えさせもしないのである。

しかしながら今や皿は、このような象徴的な個人主義を、再びより高次の形式的な共同性へと止揚する。食卓の皿は、そのつど、それ自身において完全に均質でなければならない。皿はいかなる個性も許容しないのである。様々な個人に応じた皿やグラスは、まったくもって理に反しており不快であろう。

食事を、より高次の総合的で社会的な価値をもつ、直接的で象徴的な表現へと高めようとするあらゆる歩みは、まさにそうすることで、食事に、より高次の美的な価値を獲得させる。したがって、食事という生理的な事実の美的な融和は、適切な形式が表面的に守られていたとしても、社会化の契機が消え失せた瞬間に、消滅してしまうのである。このような瞬間は、不快な大衆の食卓（Table d'hôte）に現れる。ここでは明らかに、食事のためだけにひとは出会い、場を共にすることがそれ自身の価値としては追求されない。逆に、その場にいるすべての人々と一緒に座っているにもかかわらず、これを通して、それらの人々とはどのような関わりももたないという前提がある。あらゆる食卓の装飾や適切な振る舞いも、ここでは、食事目的という物質主義的な強調を乗り越えることができない。より洗練された感覚の持ち主が大衆の食卓に対して抱く嫌悪が示すのは、社会化だけが、このような目的をより高次の美的な秩序へと導きうるということである。このような秩序の魅力に欠けているのは、場を共にすることそれ自体が自立的な意味をもっておらず、いわば魂をもたずに、装飾や振る舞いが食事の生理的な経過の不快さやみっともなさをもはや

覆い隠すことができないような場である。

食事の美学だけは、もともと様式化しなければならないことを決して忘れてはならない。それはつまり、有機的な生命の底辺に横たわっていて、それゆえまったく例外のない、欲求の充足のことである。したがって、この美学が物質的で個人主義的なものを対象とする場合には、それはそうであるからこそ自らを一人一人で異なっている状態へと高めてはならず、むしろ許される限りで、魂の均質化を美しく洗練させればよいのである。人によって異なる料理の外観は、飲食されるという目的とはうまく折り合わないだろう。それは、言ってみれば人食いのようである。

よってまた、食卓にふさわしいのは、混ぜ合わされた、陰影のあるモダンな色ではなく、一面に光沢があり、まったく原初的な感受性と結びついたような色である。それはつまり、白と銀である。食堂の調度品においては、一般に、きわめて突出した、動きのある、挑戦的な形や色が避けられ、落ち着きがあって暗く重厚な形や色が求められる。

絵画についても、好まれるのは家族を描いたものである。これにふさわしいのは、突出した注目ではなく、慣れ親しんだもの、信頼しうるもの、生の広大な基底へと遡りゆくものの感情である。料理の配置と装飾における美学は、最も洗練された晩餐の時ですら、とっくの昔に乗り越えられた諸原理によって導かれている。それらは、均整であり、まったく子供じみた色彩の刺激であり、原始的な造型と象徴である。整えられた食卓も、その形式をあえて破壊したくないと思わせないほど、それ自身に閉ざされた芸術作品として現れてはならない。芸術作品の美の本質が、我々との間に距離を置いた「触れられなさ」にあるのに対して、食卓の洗練とは、その美が食卓へと侵入するように誘っているものである。

このように厳密に食事作法の一般的な固定化を図ることは、高い身分の人々にとっては、彼らに個人主義への誘惑が特に身近であればあるほど、食事という領域の序列的な位置ゆえに、ますます必然的である。歩行や服装において、話し方やそれ以外のあらゆる振る舞いにおいてそうであるかもしれないような形で、食事において個性的であることは、まったく場違いであろう。それは内的な矛盾というだけではない。より高次のものが、より低次のもの、まったく違う次元に置かれるものへと向けられるという、価値的な不適切さなのである。そこでは、より高次のものはいかなる端緒も見出さないし、空虚さへと吸い込まれるにちがいないのである。食卓での会話もまた、それが様式のうちにとどまろうとするならば、一般的で典型的なテーマとその論じ方を越えて、個人的な低俗さへと立ち入ってはならない。

さて、これらのすべては、生理学的な合目的性という観点からも説明されうる。というのも、このような合目的性は、私たちに食事の際の集中と平静さを要求する。しかし、このことは、身体が語る言語の中でのみ、より深い社会心理学的な連関を表わす。そのような連関とは、ここでは、まったく原始的な欲求が確実に広がることにより、そのような欲求に社会的な現実化が与えられたということである。その現実化を通して、欲求は、より

高い、精神的な魅力の領域へと高まるのだが、なお、その基礎からは決して完全に解き放たれない。普段の食卓の会話の平凡さを悪く言うことは、それゆえまったく誤っている。優雅ではあるが、しかしつねに一定の一般性と控えめさを保っている食卓の会話は、あの基礎を決して完全に感じることができないようにすべきではない。というのも、基礎をしっかりと保っている性格においてようやく、会話が織りなす表面の戯れのもつ、きわめてくつろいだ軽快さや優美さが現れるからである。

ここで思い出されるのは、生の諸領域の全体的な序列の中で最も低次にある諸現象、いやそれどころか否定的な諸価値とでもいうべきものは、より高きものの発展のための通過点であるというだけでなく、また、より高きものがそこから際立つ背景であるだけでなくて、その低さはまさにそれ自身で、より高きものが成立する基盤でもあるということだ。

ダーウィンが述べるように、例えば同じくらいの大きさの動物と比較するとヒトの身体は脆弱だったということが、ヒトを孤立した存在から社会的な存在へと導いた動機だったのだろう。しかし、このような身体的な脆弱さが、知性と意志のもつあらゆる能力を発展へともたらした。そのような能力を通して、ヒトは今やその肉体的な劣等性を補うだけでなく、そのような能力は――したがってまさにこの劣等性という理由に基づいて――人間の総体的な強さを、すべての敵対者に対する優位へと高めたのである。

自己に関わる道徳の諸要素の中にも、同じ形式が見出されうる。誘惑しうることと誘惑されること、罪と責任とが、確かに道徳的な段階の一方の極にある。そのような段階は、それらを、なめらかな移行によって善さや純粋さと結びつけることすらしないかもしれない。しかしながらやはり、最も道徳的に高きものも、私たちの存在のあの暗がりと、低きに位置するものよって、直接に条件づけられているのである。

誘惑との戦いを必要としないならば――それゆえ聖人伝では救済者すらそのような誘惑から免れさせてはもらえないのだが――、弱さや感覚的なもの、利己的なものから抜け出そうとする努力を必要としないならば、誰が道徳的な功績について語るのだろうか。悔い改められた罪人については、十人以上の義人よりも天国での喜びが多くある[(1)]ことは、この内的な構造を表しているにすぎない。このような構造の中では、否定的なものは、私たちにとって価値あるものの向こうにある単なる影の部分なのではない。その性格にしたがってもっぱら価値あるものから遠ざかってしまうような反対方向なのでもない。むしろ、肯定的なエネルギーからと同様に、否定的なものそれ自体から反対のものが展開する。暗がりや悪だけが、あたかもそれ自身で急転回するかのように、私たちにも手が届きうるような、最も明るきもの、最も価値のあるものを生み出しうるのである。

この文章で取り扱われているような領域への無関心さと凡庸さが見誤ってはならないのは、このような領域においても、その類型のもつ逆説的な低さが生きて働いているということである。私たちは食べなければならない。そのことは、私たちの生存という価値の発展において、原始的で低きにある事実である。そのため、そのような事実は、あらゆる個

人にとって疑いもなく他の個人と共通のものである。このことがまさに、共同の食事のための集まりを可能にするし、そのように媒介された社会化において、食事の単なる自然主義の克服は展開するのである。食事がそのように低いものでなければ、供儀的な食事の意義へと、また、その最終的な形式の様式化と美学化へと高まるような架け橋をそれは見出さないであろう。

悲劇的なものの本質とは高きもの自身が崩壊することだとすれば、また、最も大きなショックを与える悲劇的なものの姿が、理想的な価値をまさに理想的な価値と戦わせ、それによってそのような価値を、取るに足りないものや否定的なものへと沈めさせるとすれば、ここで追究された展開は、このような宿命とはまさに逆のものである。なぜならば、ここでは低きものや取るに足りないものは、それ自身によって、それ自身を越えて成長したからである。低きものは、まさに、それが低さであることによって、より精神的なものや、より意義のあるものへと高められたのである。ここでは依然として生の類型の意義は、それが意義のないものに応じて形成されることをも退けないようなところで、まさに現れるのである。

※これは、Georg Simmel, *Soziologie der Mahlzeit*, in: R.Kramme u. A. Rammstedt (Hrsg.), Georg Simmel, Aufsätze und Abhandlungen 1909-1918 Band I, Baden-Baden 2001. を翻訳したものである。

【訳注】

(1) ルカによる福音書第 15 章 7 節を念頭に置いていると思われる。

＊訳文では読みやすさを優先し、原文の改行に従っていない部分がある。